

果 心 居 士

果 心 居 士

天正年間、京都の北の方の町に、果心居士と云ふ老人がゐた。長い白い鬚をはやして、いつも神官のやうな服装をしてゐたが、實は佛畫を見せて佛教を説いて生活を營んでゐたのであつた。晴天の日にはいつも祇園の祠の境内で、木に大きな掛物をかけるのが習慣であつた、それは地獄變相の圖であつた。この掛物はそれに描いてある物が悉く眞に逼つて巧妙にできてゐた。そして老人はそれを見に集まつて居る人々に見せて、携へてゐた如意をもつて色々の責苦を詳しく説き示し、凡ての人に佛の教に従ふやうに勧めて、因果應報の理を説いてゐた。その繪を見て、それについて老人の説教するのを聞くために、人が群をなして集まつた、そして喜捨を受けるためにその前に敷いてあるむしろは、そこへ投げられた貨幣の山で、表面が見えない程であつた。

その當時、織田信長が畿内を治めてゐた。彼の侍臣荒川某、祇園の祠へ參詣の途中、偶然そこでその掛物を見て、あとで殿中に歸つてその話をした。信長は荒川の話聞いて興味を感じ、直ちに果心居士に幅を携へて參上するやうに命じた。

掛物を見た時、信長はその繪のあざやかさに驚いた事を隠す事はできなかつた、鬼卒及び罪人は實際彼の眼前に動くやうであつた、そして彼は繪の中から叫號の聲を聞いた、そしてそこに描

いてある鮮血は實際流れて居るやうであつた、——それで彼は、その繪が濡れて居るのではないかと指を觸れて見ないわけに行かなかつた。しかし指は汚れなかつた、——即ち紙は全く乾いて居るからであつた。益々驚いて信長はこの不思議な繪の筆者を尋ねた。果心居士はそれに對して、それは名高い小栗宗丹が、——靈感を得んがために清水の觀世音に熱心に祈り、百日の間毎日齋戒を行つたあとで、——描いた事を答へた。

その掛物をたしかに信長が所望して居る事を見て、荒川はその時果心居士にその幅を信長公に献上してはどうかと尋ねた。しかし老人は大膽に答へた、——『この繪は私のもつて居る唯一の寶で、それを人に見せて少し金を儲ける事ができるのです。今この繪を信長公に献上すれば、私の生計の唯一の方法がなくなります。しかし、信長公が是非お望みとあれば、黄金壹百兩を頂きたい。それだけのお金で、私は何か利益のある商賣でも始めませう。さうでないと、繪はさし上げられません』

信長はこの答を聞いて、喜ばないやうであつた、そして黙つてゐた。荒川はやがて何か公の耳にささやいたが、公は承諾したやうになつた、それから果心居士は少しのお金を賜はつて、御前から引き下がつた。

しかし、老人が屋敷を離れると、荒川はひそかに跡を追つた、——奸計をもつてその繪を奪ひ取るべき機會を得ようとしたのであつた。その機會は來た、果心居士は郊外の山の方へ直ちに通ずる途に偶然さしかかつたからであつた。彼が山の麓の或淋しい場所に達した時、彼は荒川に捕へられた。荒川は彼に云つた、——『その幅に對して黄金百兩を食るのは何と云ふ慾張りだらう。黄金百兩の代りに、三尺の鐵の一片をやる』それから荒川は劔を抜いて老人を殺して、幅を奪つた。

翌日荒川は掛物を——果心居士が信長の邸を退出する前に包んだ通りに包んだままで、信長に獻上した、信長は直ちにそれを展いて掛ける事を命じた。しかし展いて見ると、信長も彼の侍も二人とも、繪は全く無い、ただ白紙だけである事を見て驚くばかりであつた。荒川はどうして、もとの繪が消え失せたか説明ができなかつた、そして彼は——知つてか或は知らないでか——主人を欺いた事について罪があるので、處罰されるときまつた。それで彼は長い間閉門齋居を命ぜられた。

荒川の閉門の時期が終るか終らないうちに、果心居士が北野の祠の境内にその名高い繪を見せ居ると云ふ通知があつた。荒川は殆んどその耳を信ずる事ができなかつた。しかしその通知を得て、彼の心にとりかしてその掛物を奪つて、それで先頃の失策を償ふ事ができさうな望みが

湧いて来た。そこで彼は急いで従者の幾人かを集めて、寺に急いだ、しかし彼がそこに達した時に、彼は果心居士が去つてしまつたと云はれた。

幾日か後に、果心居士がその繪を清水堂で見せて、大きな群集に對して、それについて説教して居る事が知れて来た。荒川は大急ぎで清水へ行つた、しかし、そこに着いた時、群集は丁度散つて居るところであつた、——即ち果心居士は再び消えて、ゐなかつたのであつた。

たうとう或日の事、荒川は思ひがけなく或酒店で果心居士を認めてそこで彼を捕へた。老人は自分の捕へられたのを見て、機嫌よくただ笑ふだけであつた、そして云つた、——『一緒に行つて上げるが、少し酒を飲むまでお待ちなさい』この要求には、荒川は異存はなかつた、そこで果心居士は十二の大杯を飲みつくして、觀て居る人々を驚かした。十二杯目を飲んでから少し満足したと云つた、それから荒川は命じて彼を繩でしばつて信長の邸へ連れて行つた。

邸の取調所で、果心居士は、直ちに奉行の取調を受けた、そして嚴しく責められた。最後に奉行は彼に云つた、——『お前は魔術で人を欺いてゐた事はたしかだ、その犯罪だけで、お前はひどい罰を受ける資格がある。しかしもしお前がその繪を信長公に恭しく獻上すれば、今度はお前の罪は大目に見てやる。さもなければ、甚だ重い罰を必ず課する事にする』

このおどかしを聞いて果心居士は困つたやうな笑方をした、——『人を欺くやうな罪を犯したのは私ではない』それから、荒川に向つて、彼は叫んだ、——『お前こそうそつきだ。お前は繪をさし上げて信長公に誂はうとした、そしてそれを盗むために私を殺さうとした。罪と云つた

ら、これ程の罪はどこにあるか。幸にして、お前は私を殺す事はできなかつた、しかし、お前の望み通りにできたらその行に對してどんな辯解ができるか。とにかく、繪を盗んだのはお前だ。私のもつて居る繪はただの寫しだ。お前が繪を盗んでから、信長公に獻上する事がいやになつたので、その祕密の行や心をかくすために、その罪を私に着せて、私が本物の繪を白紙の掛物と取替へたと云つて居るのだ。どこに本物の繪があるか私は知らない。多分お前は知つて居るのだらう。」

かう云はれて、荒川は怒りの餘り、驅け寄つて、果心居士を打たうとしたが、番人等に遮ぎられて果さなかつた。しかしこの不意の怒りの破裂は、奉行に荒川が全く無罪ではあるまいと思はせる事になつた。暫らく、果心居士を獄に下してから、奉行は荒川を嚴しく調べにかかつた。ところで荒川は元來訥辯であつたが、この場合、殊に興奮の餘り、殆ど云ふ事ができないで、吃つたり、撞着したりして、どうしても罪のありさうな形跡を表はした。そこで奉行は、荒川を打つて白状させるやうに命じた。しかし事實の白状らしい事も彼にはできさうになかつた。そこで彼は鞭で打たれて、感覺を失つて、死人のやうになつて倒れた。

果心居士は獄にゐて、荒川の事を聞いて笑つた。しかし少ししてから、彼は獄吏に向つて云つた、——『あの荒川と云ふ奴は全く姦邪の振舞をしたので、私は態とこの罰を與へて、彼の悪い心根を懲らしてやらうとしたのだ。しかし、荒川は事實を知らないに相違ないから、それで私は

よく分るやうに一切の事を説明しますと今奉行に傳へてくれ給へ』

それから果心居士は再び奉行の前に連れられて、つぎのやうな宣言をした、——『本當に優れた繪なら、どんな繪にも魂がある、そして、そんな繪には自分の意志があるから、自分に生命を與へてくれた人から、或は又正しい所有者から、離れる事を好まない事がある。眞の畫には魂がある事を證明するやうな話が澤山ある。昔、法眼元信が襖に描いた雀が何羽か飛んで行つて、そのあとが空になつた事はよく知られて居る。掛物に描いてある馬が毎夜草を喰ひに出かけた事もよく知られて居る。ところで、今の場合は、事實はかうだと私は信ずる、即ち信長公は私の掛物の正當の所有者ではなかつたから、繪が信長公の面前で展かれた時、紙の上から自分で消えたのであらう。しかし、もし私が始めに云つた通りの價段、——即ち黄金壹百兩、——をお出しになれば、その時は私の考では、繪はひとりで今白紙になつて居るところへ現れませう。とにかく、やつて見えてはどうです。少しも危い事はない、——繪が現れなければ、金は直ちに返すまでの事だから』

こんな妙な斷言を聞いたので、信長は百兩を拂ふ事を命じて、その結果を見るために親しく臨席した。それから掛物は彼の前で展かれた、そして列席者一同の驚いた事には、その繪は、悉く詳細に現れた。しかし色が少しさめて、亡者と鬼卒の形が、前のやうに生きて居るやうでなかつた。この相違を見て、信長公は果心居士に向つて、その理由を説明するやうに求めた、そこで果心居士は答へた、——『始めて御覽になつた繪の價値は、どんな價もつけられない繪の價値でし

た。しかし御覽になつて居る繪の價値は、正にお拂になつた物——即ち黄金壹百兩——を表はして居ります。……外に仕方がございません』この答を聞いて列席の人々は、もうこれ以上この老人に反對する事は到底無効である事を感じた。彼は直ちに赦された、そして荒川も亦赦された、彼の受けた罰によつて彼の罪は十二分に償はれたからであつた。

ところで、荒川に武一と云ふ弟があつたが、——やはり信長の侍であつた。武一は荒川が打たれて獄に入れられたのを非常に怒つて、果心居士を殺さうと決心した。果心居士は再び放免されるや否や、酒屋へ行つて酒を命じた。武一はそのあとから店に入つて、彼を斬り倒し、首を切り落した。それから老人に拂はれた百兩を取つて、武一は首と金とを一緒に風呂敷に包んで、荒川に見せるために家に急いだ。しかし彼が包みを解いて見ると首と思つたのは空の酒徳利で、黄金は土塊であつた。……それから間もなく、首のない體は酒屋から歩き出して、——どこへだか、いつだか誰も知らないが、——消え失せた事を聞いて、この兄弟は益々驚くばかりであつた。

一月ばかり後まで、果心居士の事は知られなかつた、その頃になつて、信長公の邸前で、遠雷のやうな大軒をして寝て居る一人の泥酔者があつた。一人の侍が、その泥酔者即ち果心居士である事を發見した。この無禮な犯罪のために、老人は直ちに捕へられて牢に入れられた。それでも眼をさまさない、そして牢で彼は十日十晩間斷なく眠り續けた、——その間たえずその高軒が餘

程遠くまで聞えた。

この頃に、信長公は部下の一人である明智光秀の反逆のために死ぬやうになつたので、光秀がそれから政を取つた。しかし光秀の権力は十二日しか續かなかつた。

ところで、光秀が京都の主人になつた時、彼は果心居士の事を聞いた、それから命じて、その囚人を彼の前に出させた。そこで果心居士は新しい君主の面前に呼ばれた、しかし光秀は彼に丁寧な言葉をかけて、賓客として待遇し、そして立派な饗應をするやうに命じた。老人に御馳走をしてから、光秀は彼に云つた、——『聞くところによれば、先生は大層お酒が好きださうです、——一度にどれ程めし上がりますか』果心居士は答へた、——『量はよくは知らんが、酔へば止めます』そこで光秀公は果心居士の前に大盃を置いて、侍臣に命じて老人の飲めるだけ、幾度となく、酒を注がせた。そこで果心居士は、續いて十度大盃を飲み干して、さらに求めたが、下來は酒が盡きた事を答へた。列席の人々で、この強酒ぶりに驚かない者はなかつた、そこで光秀公は果心居士に尋ねた、『先生、未だ不足ですか』『はい、少し満足しました』果心居士は答へた、——『ところで御親切の御返禮として、私の技を少し御覽に入れませう。どうかその屏風を見てゐて下さい』彼は大きな八曲屏風を指した、それには近江八景が描いてあつた、そのうちの一つに、湖上遙かに舟を漕いで居る人があつた、——その舟は、屏風の表面では、長さ一寸にも足りなかつた。果心居士は舟の方へ手をあげて招いた、すると舟が突然向き直つて、繪の前面の方

動へき出すのが見えた。近づくに随つて段々大きくなつた、そして船頭の顔つきが、はつきり認められるやうになつて來た。やはり段々舟が近くなつて來た。——いつでも大きくなつて、——たうとうそれが近くに見えて來た。それから突然、湖水が溢れて來るやうであつた、——繪から、部屋へ、——そして部屋は洪水になつた、そして水が膝の上まで達したので見物人は急いで着物をかかげた。同時に舟が、——本當の漁船が、——屏風の中から、滑り出すやうであつた、——そして一丁の艫の軋る音が聞えた。やはり部屋の中の洪水は増す一方であつたので、見物人は帶まで水に浸つて立つてゐた。それから舟は果心居士のところへ近づいて來た、そして果心居士はその舟に上つた、そこで船頭はふりかへつて、甚だ速かに漕ぎ去らうとした。それから舟が退いた時、部屋の水は急に低くなつて、——屏風の中へ退却するやうであつた。舟が繪の前面と思はれるところを通過するや否や、部屋は再び乾いた。しかし、やはり繪の中の舟は、繪の中の水の上を滑るやうであつた、——段々遠くへ退いて、段々小さくなつて行つて、たうとう最後に沖の沖の一點となつて小さくなつた。それから、それは全く見えなくなつた、そして果心居士はそれと共に消えた。彼は再び日本には現れなかつた。

(田部隆次譯)

The Story of Kwashin Koji. (A Japanese Miscellany.)